

藝術と道徳家

—— D・H・ロレンス氏の作品 ——

エドワード・ガーネット

近藤 康 裕 / 訳

I

I(338)

自分の行為を道徳的に説明しようとする人間の本能と、人間の活動が積み重なってできる全体を倫理的観念という理論の網の目のなかに囲い込もうとする社会の本能は、根源的なものである。倫理によって藝術に向けられる猜疑の眼——プラトンによる共和国からの詩人の追放が典型例だ——が示しているのは、道徳にかかわる規則と社会的な慣習の枠組み（この枠組みは親切にも個別の要請に応じて融通無碍に形を変える）が美的な表象によって問題視されるのを人間は黙って見ていられないということである。美的な表象がその枠組みを無効にしようかもしれないからだ。革新的な勢力となりそうな藝術家と詩人の活動に政府も「平均的市民」もすっかり気を許してしまうこととはけっしてない。それゆえ、バイロンやシェリーのような人たちが詩によってフランス革命の種を突如、遠いところで広く播くことになったのかもしれない。

ない。あるいは、結婚というブルジョアの觀念に疵をつけかねない作者として『人形の家』のイブセンのような人が現れるのかもしれないし、キリスト教倫理をめぐるその解釈が国家の構造に脅威を与えかねない作家としてトルストイのような人物が現れるのかもしれない。生の力づよい表象に「不道徳」の烙印を押そうという国家や社会の努力はしばしば——フローベールの『ボヴァリー夫人』の場合のように——当局それ自身の頭上に跳ね返ってくる。昨年、D・H・ロレンス氏の小説『虹』が異常な状況下で発禁処分を受けたことにより、この小説の美点に関してアーノルド・ベネット氏から有力な証言がなされたから、ここではその事件についてのコメントは控えておく。ある種の本がありきたりの精神には過度の刺激を与えてしまうことがある。トマス・ハーディが小説という魔法の杖をおろしてしまったのは、『ダーバヴィル家のテス』と『日陰者ジュード』をめぐる生じた見るに堪えないスキャンダルのせいであつた。ロレンス氏の二冊の詩集を瞥見し、彼の才能が近年もつとも興味深く確固とした文学的な力のひとつであるのはなぜなのかをわたしは示したい。

ロレンス氏は要するに、本能と感情と気分について書く詩人にして心理学者である。それらに道徳的な説明を与える必要はない。倫理的觀念という社会の網の目は、わたしたち人間の情熱的な衝動が呈する光景によつてたえず異議申し立てを受けている。二つの軍隊が相手を破滅させようとして闘っている図を考えてみればよい。社会は闘う人々の行動に「愛国心」のひと言で道徳的な説明を与え、その「英雄的」な美德を強調することで殺戮を賞賛する。しかし、トルストイやガルシンのように、戦争は人間に対する犯罪であるとわたしたちに示す戦争絵図の作者として現れる藝術家もいるのだ。

しかし、動物的な衝動を抑制している手綱の緩みをロレンス氏のようなタイプの純粋な藝術家が赤裸々に描き出せば出すほど、殺戮の場面の恐怖を紙面によく定着させればさせるほど、ふつうの人間はそうした藝術家にますます不審の眼を向けるようになる。これはなぜなのだろうか。煮えたぎる情熱の世界の深淵を覆い隠す「觀念」のヴェールを藝術家が引き裂いてきたからである。だが、激しく変動する自然の感情に恐るべき美の刻印を藝術家が施すのだとしたら、そのとき

何が起きるだろうか。道德家が藝術家に対して激しい怒りをぶつけるだろう。情熱の美と感覚の燃えさかる炎に道德的な説明を与えることは困難である。それゆえ道德家は、作品が「高尚な理想」を欠いているとか、そうした感情の美的な表現は「高級」な藝術にあらずだとか、読者に有害な影響を及ぼすなどと言い募ることで、そのような藝術家を論破しようとする。しかし、わたしたち人間の意識に有害な影響が及んだことなどあつただろうか。異を唱えるこうした人たち——こんにちでは大きな群れをなしている——に対する正しい答えは次のようなものになるとわたしは信じている。あなたがたはあまりにも狭い囲いのなかに美的な表象を閉じ込めようとするので文学と道德の両方に深刻な損傷を与え、藝術家の活動に足枷をはめて制限しようとするのでわたしたちの意識を深め認識を広げるといふ藝術の機能を損ねるのだ、と。S・P・ロウ師の占める座があるのであれば、ポッカチオにも占めるべき座はある。道德家がいつも特別な目的を視野に入れておくことをわたしたちは忘れるべきではない。どんな時代でも道德家が欲しいものを手に入れ、こんにち文学と美術の古典を意のままに切り捨てたり傷つけたりできるのだとしたら、わたしたちにはごくわずかなものしか残されていないということになるだろう。エウリピデス、アリストパネス、ラブレール、モリエール、ヴォルテール、マローウ、シエクスピア、フィールディング、バイロン、シェリー、キーツ、スターン、フローベール、モーパッサン、ボードレー、ヴェルレーヌ、ホイットマン、チエーホフそしてトルストイ——彼らはみな「不道德」な傾向をもつているとして道德家連中から非難され、告発されてきた。そんな道德家たちには手短かにこう答えを返すことができる。「あなたがたの『善』の観念はあまりに狭い。あなたがたの手にかかれば、情熱を美的に描くことは家禽と変わるところのない飼ひ馴らされたものになるだろう。」そのとき藝術はつまらぬ嘘いつわりを拡散するのに手を貸すことになるだろう。これが実際に文学の世界で頻繁に起こっていることなのである。生の表象は過度に理想化されるか過剰な道德的説明が与えられる。これは戦争の「英雄的」な側面が抒情詩人によって受ける扱いと同様である。バランスを取り戻し、恐ろしくも心を引き

裂くような獣のごとき性質を描くためには、別種の藝術家、すなわちリアリストが召喚されなければならない。この性質こそ、こんにちヨーロッパの国々が経験していることなのだから。戦争について言えることは愛についてもあてはまる。愛の自己中心的な衝動と情熱的な気分についての心理学的な洞察によって、ロレンス氏は愛の活動をめぐるわたしたちの「観念的」な評価を補い、因習化した感情で誇張された評価を是正してくれる。愛についての「観念的」な評価は文学のなかで高みを占め、生においてそうであるのと同様に攻め落とすことができない。しかし、わたしたちアングロサクソンの注意を實質的に独占していることを隠れ蓑にして、感情という点では人為的、藝術としては不毛で貧弱で誤った、センチメンタルで甘ったるい愛の描写が、気を滅入らせるくらい大挙して文学の領野を覆いつくしているのをこんにちわたしたちは目の当たりにする。人々をうんざりさせ、味覚を墮落させる安手でセンチメンタルなこうした甘味に、ここでわたしは汚名を着せたいわけではない。これらが遍く広がっていくことと、美に向けられる覆い隠された敵意とが歩みをともにしているということ、そしてその結果として生じるわたしたちの精神生活の貧困を指摘したのである。功利主義的な規範をともなった物質的進歩の過度な発展がもたらす有害な影響は、現代社会において詩と藝術に与えられている人為的で寄生虫のごとき地位の示すところである。詩人と藝術家は学問としての美学やお上品な文化に奉仕する、いわばディレッタントの一派として隔離され、世俗的な活動の中心をなす動きと熱量という点で軽んじられている。世俗的な関心を廻す車輪とその機構に絡みあい、縛りつけられているわたしたちの精神生活は、美にかかわる正当な成長の機会を騙し取られ、成長を阻害されているということに気づいている。そして、おしなべて藝術が貶められていると人々の眼に映ることと、藝術には寄生虫のごとき人為的な地位しか与えられないということは、「感覚の生」に投げかけられる無作法な誹謗中傷と軌を一にしているのであり、審美的な知覚が貶められているということとは、そうした知覚が「精神的」な生とどういうわけだけ分離可能であるとの示唆と軌を一にするのである。^{*}これは莫迦げた話である。

スピリチュアル

ロレンス氏は二冊の詩集——『愛の詩その他』と『アモーレス』——においてバランスを取り戻そうとしている。詩人である氏は燃えさかる灯明としての情熱パッションを修復し、わたしたちの前に据えてくれる。卑俗な精神は、熱烈な嵐のごとき欲望という意味でのパッションから、受苦ソウクという原初の根源的な含意を感じさせられてきたと言つてよい。愛の衝動が燃えさかり、相争う性質の苦痛に苛まれた永遠へと瞬く間に転じて灰になる、総てが目くるめく旋回のなかで精神が肉体に向かつてあげる叫び、肉体が精神に向かつてあげる叫び、愛という欲望の飢えと戦慄と興奮を、ロレンス氏の愛の詩は祝福する。ロレンス氏の愛の詩はキーツの詩に輝く創造的な歓喜を情熱に取り戻してくれるのである。情熱の燃え上がるようなエゴイズム、限りのある関係と制限に対する情熱の反逆、身内から沸き起こる不調和と外部からもたらされる嫌悪という身震いするような情熱の感覚、情熱がみずからの動きのなかで翼を得て飛ばたく欲び——ロレンス氏はこれらを「精神的」に統合し、その統合は生のエネルギーの強度という点でイングランドの大半の同世代人がつくる詩よりも勝れているのだと宣言する。わたしはロレンス氏の詩の特性を誇張しようとは思わない。彼が詩に詠む気分ムードの幅はかなり限られているし、技術は性急で、視線は内に向かつて自己中心である。しかし、苛烈とも言えるほどに感覚を研ぎ澄まし、感情を濃縮しているという点で、ロレンス氏は生の大海でうねりをあげる感情のエネルギーの潮流から言葉を発しているように思われる。彼の力の源は強度に満ちて震える火であり、それは夜の庭園で燃えさかる炎のように形状と色彩と運動からなるキアロススクローをなしつつ、かすかに轟く大地から星の輝く夜空に向かつて暗闇を押し返す火なのだと言おう。詩人の心象はこのように原初的な感情の色あい——あわれみあるいは残酷さの気分、情熱的な羨望、かなしみ、恐怖、やさしさ、疼くような欲望、悔悛、苦痛——と深くかかわりあう。この心象はロレンス氏の感覚から直接に湧き出し、時々刻々と移りゆく感情のヴィジョンから生まれ出るものなので、わが国の才能あるディレッタント詩人たちの大部分とは異なり、涵養された想像的思考から出てくるものではないのである。その心象は過ぎゆく一瞬一瞬に自然が刻み込む雰囲気アトモスフィアの

印象である感情を瞠目すべき度合いで伝えてくれる。ここで実例を見るにしくはない。

「苦痛のあとに眠る赤ん坊」

水に落ちてずぶ濡れになった蜂が

首を垂れる花に重々しく感覚をなくしてぶら下がるところ、

僕の赤ん坊は

涙に濡れた茶色の髪を

頬っぺたに貼りつけて僕にしがみついている。

その柔らかくて白い脚が僕の腕から重々しく垂れ下がりに、

歩く僕の動きにあわせて重々しく揺れている。

眠っている赤ん坊は僕の命にすがりつく、

重い荷物のように赤ん坊は僕にぶら下がる。

いつも赤ん坊はとても軽いように思えたのだけれど、

涙に濡れて苦痛で感覚をなくしているいま

彼女のふわふわとした髪さえも重々しく、

下に向かって垂れている。

水に落ちてずぶ濡れになった蜂の羽が

重々しく疲れ果てているように。

ことさらな努力をしているようでもなく、かくも素朴に、かくも自発的に、この詩は感情的な気分にある瞬間の至福をあまりとことろなくとらえている。感性に刻まれた印象を詠む詩人の表現は心理学的に真実であると同時に、その魅力という点ではもつとも精神的である。しかし、わたしたちはここでいったん立ち止まり、ロレンス氏の小説に考察を加えなければならぬ。

* F・L・パティ教授は「一八七〇年以降のアメリカ文学史」のなかでこう書いている。「キーツにとって美とは感覚に欲びをもたらし、それ以上の欲びを……キーツは現実のイングランドからうんざりしたように眼をそらし……審美的な欲びの世界へと向かう。その世界で彼は美という夢に浸って自分だけ恍惚となるのだろうか。」

II

『白い孔雀』（一九二一年）とともに新しい藝術的な力が小説のなかに生まれようとしていたことは、批評する者の眼に明らかだった。専門家の数多くの忠言による入念な破門の儀式で厳粛に追い払われた「リアリズム」と「ナチュラリズム」の両方の性質が、熱烈な詩的感受性とあふれんばかりの自然への疑いようもない欲びをとらえて、再度この小説のなかに現れたのは興味深いことである。ここにはゾラ氏の「誤ったナチュラリズム」も「科学的報告」もない。一方、ロレンス氏の藝術家としての欠点は、怒濤のように押し寄せる印象とほとばしる感情が跳梁跋扈して抑制されないという点

にあった。田舎の暮らしを描き出すストーリーは、農業に従事する若者ジョージの気づかぬままに進行する墮落を詳細にたどる。初心うぶな女性みたにおっとりしている彼は、相応しからぬ女を妻に娶る。この作品は、率直で隠し立てをしない想像力の肥沃さとあふれんばかりの色彩に満ちているが、困惑を禁じえない一冊でもある。女性的な愛の本能に尋常でなく密着すると同時に、抑制されることのない心理学的関心を情熱の全範囲に寄せている。しかしその輪郭には、過度に大胆で野放図な未熟さとまとまりを欠いた趣味の放縦さによって混乱が生じてしまった。どこで沈黙を守り、どのように場面を選んで注意を集中させるべきか、年若い藝術家がわかつていなかったのは明らかである。こうした欠点は、敏感で意志薄弱だが情熱的な男性主人公の、情熱を弄ぶ浅薄で冷淡な女性とのつかの間の情事を描いた『侵犯者』(一九二二年)ではさほど表立って現れなくなる。『白い孔雀』と変わらない、身体的な印象に対する強烈な感受性と感覚的な感情の打ち震えんばかりの歎びは、性愛という名の弦楽器の独奏によってここでも繰り返されている。西洋夏雪草メドウスウイートの匂いがたちこめるその雰囲気は悲劇のもたらす衝撃のため突如として雲散霧消する。シーグムンドが自殺し、その忘れっぽい家族がブルジョア的な平凡さという手なずけられた流れに身を任せて落ち着きを取り戻すさまが、揺るぎない誠実さと大いなる心理学的眼力で描き出される。だが、ときどき見られる言葉と語調の凡庸さは、ロレンスという藝術家の知覚力の強度と噛みあっていない。しかしロレンス氏は、第三作目の小説『恋しい息子たち』で批評家を沈黙させた。この小説は、バルザックもフローベールも羨望したのであろう辛抱強い周到さと大胆な正直さをもって大きな画布に描かれた一個の社会史であり、炭坑地方の家庭生活について詠まれた叙事詩である。幸薄い結婚をした労働者階級の女性が強いピューリタン精神に支えられて子育てに奮闘するという中心テーマは、自分の息子を他の女性の腕に譲り渡すことに母親が感じる反撥の検討へのちに展開される。愛情に満たたひるむことのない正確さでテーマは最深部の精神的な組織まで解剖され、炭坑地方の生活の心揺さぶる厳しい現実を印象的な背景として家族のドラマが繰り広げられる。この小説は、労働者階級の生活を

中流階級の掌中から解放し、それを確固とした誠実さという本来の雰囲気のなかに置くことのできる、現代イギリス小説のなかで真に唯一の目端が利いた作品である。炭坑の仕事に携わる人々、そうした人々の精神的な態度と暮らしのあり方、習慣、そして家庭生活の歎びと気遣いという中心的な要素が、隣の村で農業に従事するいくつかのタイプの人々と対比されている。愛しあう若い男女の情熱的な眼には、産業主義が煙をあげながら地平線上で静寂な森と牧草地の魔術のなかに融合していくように映る。表現は全体としてあやまつことなく正確であり、精神的に深い。写真のように正確な語りを感じると、後半の愛の場面のいくつかに見られる節度の欠如だけがわずかな瑕瑾である。夫と妻の人生の衝突という中心的なテーマは、情熱の真实性という点でみごとに人間的な悲劇である『寡婦ホルロイド夫人』（一九一四年）でもあらためて扱われている。これは、最初は鼻息荒く怒りで身体を熱くした力づよい原始的なタイプの人物たちが蒼白でむき出しの厳然たる死に直面するさまを、深いところまで細かく観察した作品である。この演劇は、ロンドンで上演される芝居の子供っぽい軽薄さと受け狙いの扇情主義とは対照的に、労働者の印象的な姿を刻んだムーニエの彫刻のように演芸場の白々と空虚な大理石のホワイエで異彩を放つ。短篇集『プロシア士官』（一九一四年）では、もつとも扱にくい素材に対して詩人兼心理学者の想像力の強度が勝利を収めている。これもまた、肉体と精神の両方を震撼させ、人生という素材をみずからに従わせ、煙の立ちこめる暗闇から光りへと自然の熱烈な細胞を通して突き進む情熱が収めた勝利である。厳格なプロシアの士官が抱きつづける嗜虐的な欲望であれ、吐き気を催させるほどの惨めさによってバイエルン出身の若い従卒の心に燃え上がった復讐の炎であれ、互いに愛を告白する若い炭坑夫と牧師の娘が味わう残酷な宙づり状態と苦悩であれ、「春の翳」の離ればなれになった恋人たちの舐める皮肉な後悔の悲痛であれ、「薔薇園の影」の妻が自分の過去を無神経に告白したことによってもたらされる憎しみと苦悶であれ、十二の短篇のいずれにも見られるのは、抑えきれずにくすぶる情熱の力と、性生活の根柢にある疼くような快樂と苦痛に融け込む情熱の力のおなじ詩的な実現であり、うねっては碎け

る感情の波に双つながら備わるおなじ感覚と魂である。

ここにロレンス氏のヴィジョンの特質と明白な境界の秘密がある。暑い夏の真昼の一本の木の影がそうであるように、彼の藝術が落とす影は濃く短い。彼の描く人物たちは、それらが活動範囲とする魔法をかけられたような情熱の円環を遠く離れては生きていくことができない。この円環が、たとえばモーパッサンの文学の領野と較べて狭いのは、ロレンス氏の詩的な強度が心理学的な洞察を制限しているためだと考えられる。あらためて言うが、彼の感情的な強度は感受性の強さと一体であつて切り離せない。ここでわたしたちは、本論の冒頭で触れていったん脇に置いておいた、道德家がいつも藝術に向ける猜疑の眼についての見解に戻ることができよう。情熱について書かれた文学への攻撃（そして、情熱の炎に油を注ぐ、感覚的な美それ自体への間接的な攻撃）は一般的に、そういう文学は人間の「より高尚で精神的」な本能と対立するものだという議論の方向性にそつて繰り出される。これに対する答えは、藝術家によつて確立された自然の道德と人間の道德のあいだの関係および均衡によつてしか、そうした文学のひとつひとつの实例を判定することはできないというものである。愛の生活では、性的な誘引力という根源的な本能と、抑制するはたらしをもつた世俗的な分別とか家族や社会の義務にかかわる本能とのあいだでの闘争が終わることはない。情熱の文学を無力化し抑圧しようとする道德家は「観念的」な天秤を人間の根源的な本能の毀損のほうへと過度に傾けている。このことは、「身体」に向けられる禁欲的な悪口がまさしくそうであるように、精神的な生に有害な作用を及ぼす。わたしたちの商業化した社会で物質主義と工業の汚穢がいつそう大きな勝利を取めるにつれ、「審美的な喜びの世界」にはますます多くの軽蔑が向けられるようになり、藝術と詩と感覚的な美に払われる敬意は減る一方である。だからすでに見たとおり、「美という夢に浸つて自分だけ恍惚となる！」というのでキーツは非難を受けるのである。感覚に惑溺するようになるという理由で情熱の誠実な描写を切り捨てる道德家連中はキーツの代わりに誰を据えようというのだろうか？ これこそロレンス氏の作品の場合にもわたしたちが問うて

いることなのだ。すでに述べたように、ロレンス氏の作品は「情熱」^{パッション}にそのもともとの意味である受、苦^{レキ}というニュアンスを取り戻させた。ロレンス氏の描く恋人たちは大衆小説に出てくる聡明な若者たちではない。そういう若者たちの愛の観念は成功と世俗的な意味での繁栄、立派な家を所有して近所の人たちから羨ましがられるといったことと不可分に結びついている。ロレンス氏の描く恋人たちは揺れ動き、苦しむ。そして彼らには物事の意義が明かされる。彼らは自分たちの情熱的な欲望を成就させたり喪つたりしながら多くのことを経験し、多くのことに耐えなければならぬ。こうした恋人たちの経験は、道徳家が実にいい加減に呼ぶところの「感覚的な充足」にすぎないわけではなく、精神的な経験^{スピリチュアル}なのである。だからこそ、わたしたちの自然の欲求における感覚的で動物的な要素と本能のロレンス氏による表象には道徳的な説明を与える必要などないというのがわたしの主張なのである。こういった要素は実際に存在するのだし、ある意味ではそれを土台にして道徳的な存在であるわたしたちは時間をかけて養育される。わたしたちの情熱的な衝動——抑えられているのであれ、行動に移されようとしているのであれ——を誠実に表現できる藝術家（それができるのはごくわずかだが）は文学のなかで絶対に必要な地位を占める。性的な感情に発する活動に現れるような自然の道徳と世俗的なふるまいとの関係を探求する文学のなかでロレンス氏の小説は高い地位を占めている。短篇「牧師館の娘」は自然の道徳と世俗的なふるまいのあいだでしばしば起きる衝突についての感嘆すべき分析である。「次善の策」「薔薇園の影」と題された小品は、道徳家たちが「観念的」な尺度を上置くことであまりにもひどく狂わされた欠くべからざる均衡を恢復させる。これらの作品に「洗礼式」と「白い靴下」を加えてもよいだろう。これらは、道徳家によって考えられるごとき「善」は感情的なエネルギーのはたらきをあまりにも狭い範囲に閉じ込めてしまうのだとわたしたちの根源的な意識に訴えかけた。これらの短篇における「情熱」の擁護は、民族の健全さを求める本能のうちに生じるように思われる。しかし、この題目についてわたしは十分に述べてきたから、次のことを付け加えるだけにとどめておこう。このような藝術作品の存在する権利に

異を唱える批評家が、もし「道徳」の道から離れて「審美」の道を行くならば、もつと繊細な部分にまで理解を深められるかもしれないのと。

【付記】

ここに訳出したのは、ジョウゼフ・コンラッド、W・B・イエイツ、フォード・マドックス・フォードらを世に送り出したこと知られるエドワード・ガーンネット（一八六八年～一九三七年）が、一九一六年十一月に文藝誌『ダイアル』（*The Dial*）に発表した“Art and the Moralists: Mr. D. H. Lawrence's Work”と題された評論である。ガーンネットは作品の原稿を読んで出版の可否を判定する原稿「読者」として可能性を秘めた作家を発掘しただけでなく、作品を磨きあげるために助力を惜しまない無類の名編集者にして名伴走者でもあった。ロレンスが一九一一年にガーンネットの知遇を得たことが「彼の人生の一大事」と呼ばれうる主な理由は、ロレンスの作家としての名声を確立した『恋しい息子たち』の原稿にガーンネットが大鈍を振るい、この小説の完成度を二十世紀英文学史上屈指の名作の域に高めたからである。二人の関係は、『荒地』の草稿に添削を加えてこの詩が不動の地位を得ることを可能にしたエズラ・パウンドとT・S・エリオットのそれとも比すべき、文学史に残る記念碑的な出逢いのひとつであると言えよう（『荒地』が米国で発表されたのはガーンネットのロレンス評が載ってからちょうど六年後の一九二二年十一月の『ダイアル』誌においてであった）。ガーンネットによるこの評論の重要性は、文中に触れられているように、一九一五年に出版された『虹』が猥褻印刷物として差し押さえられたことや、ロレンス最後の小説『チャタレー夫人の恋人』をめぐる裁判が広く人々の耳目を集める事件になったことから、あたかも性愛をことさらに描いた作家であるかのように思われがちなロレンスの作品のまさにそうした側面に焦点をあて、そこにロレンス文学の本質的特徴と意義を見出ししている点にある。これを説明するガーンネットの文章は、それ自身が文学作品の文体に勝るとも劣らぬ修辭と表現に彩られており、彼が名伯楽であったということのみならず傑出した文章家でもあったことを証している点で興味深く、ロレンスについて書かれた同時代の文章のなかでも簡潔にして要を得た稀有なもののひとつであると思われることから、ここにあって邦訳を試みた次第である。

訳出に際しては、『*The Dial*』に掲載された原文と、それを収録した David Ellis and Ornelia De Zordo eds., *D. H. Lawrence: Critical Assessments, Vol. I* (Mountfield: Hein, 1992), pp.78-84. の両方を参照したが、この両版で異なる場合には後者の表現に従った。

* 井上義夫『薄明のロレンス——評伝D・H・ロレンスI』(小沢書店、一九九二年) 三二〇頁。